

## 木曾の小太郎

次のページに記載されています、  
塚脇小学校5年 井上瑠芙さん  
の人権作文「みんなが笑顔になる  
ように」出てくる「木曾の小太郎」  
のお話の概要です。

木曾に小太郎という働き者の若者がいた。

小太郎は、隣村のかおると恋仲になり夫婦になる約束をした。ところが、小太郎の両親はこの結婚を許さない。

「あの娘だけは、絶対に駄目だ！」

「小太郎、頼むからお父の言うことを聞いてくれ」

「なんで、かおると夫婦になっちゃいけないんだ」

「[よりによって『狐つきのうち』の娘なんか、あそこの娘を嫁にしたら、狐に取りつかれるんだ」

「そつだとも、小太郎、悪いことは言わねえ、諦めてくれ」

両親は、□をそろえてそつ言った。めったに□答えしない小太郎が怒った。

『狐つき』ってなんだ。訳のわからねえことを言って、諦めるなんて。いくらお父やお母の言うことでもそれだけは聞けん」

「この親不幸者、出ていけ！」

父親はげんこつを振り上げ、小太郎は家を飛び出す。

木曾川のそばに佇む小太郎、心配して追いかけてきた仲良しの五平に親との言い争いを話す。

「そりゃ、お父の怒るのも無理ねえ。俺も心配してたんだ。諦めろや。ろくなこつはねえ。村のみんなもみんなそつ思うに決まってることだ」

「狐にとりつかれてどういうことだ？『狐つきのうち』って、どんなうちだ？」

小太郎は、五平に聞いた。でも、五平には答えられなかった。

小さな村のこと、小太郎とかおるの噂はたちまち広がった。小太郎が本当のことを知ろうとやっきになればなるほど、村人は黙ってしまつ。そればかりか道で会っても挨拶さえ

してくれなくなった。  
小太郎は苦しみ、あの働き者が仕事まで休むようになった。

そんなある日、隣村の正善寺の和尚さまならかおるのうちゃ『狐つき』のことを知っているという話を聞いた。

小太郎は、寺に走った。

「おお、そうか。そんなことで苦しんでいたのか」

和尚さまは、ぼつりぼつりと話し出した。

「昔、山伏と言ってな、山で修行する坊さんたちが他所の土地からこの木曾にやってきたんだ。かおるの先祖はその山伏でな。この地が気に入り住みついたんだ。山伏は、色んなことを知っていて、とくに草木から薬を作るのが上手かったんじや。お陰で村人たちも助かって、かおるの先祖がここに住むのを喜んで許したというわけじや。」

しかし、かおるの先祖がこつこつお金を貯め、だんだん金持ちになつていくと、村人たちは妬むようになった。

『他所から来た者が俺たちより金持ちになった。あれはただ者ではない。』

狐を使って金儲けをしているに違いない」

陰□は、村中に広がり、みなそれを信じるようになったんじや。『狐つき』は村人たちが作った迷信だよ。迷信に振り回される人間ほど愚かな者はいない。そつじやろ、小太郎」と。

小太郎は、和尚の話をすぐさま両親に話すと、

「俺たちはいいが、村ん者はどう思うか。簡単にはいかねえぞ」と父親は横を向いてしまった。

しかし、小太郎は負けていなかった。五平に手伝ってもらい、話のわかってもらえそう若者から「狐つき」は迷信だと話して回った。正善寺の和尚さまも力を貸してくれた。

小太郎の両親は、小太郎たちの真剣な様子を見て自分たちの考えが間違っていたことに気付き、二人の結婚を許した。

幸せな二人の間にかわいい赤ん坊が生まれた頃、村人の心にあった「狐つきのうち」の迷信は、だんだん少なくなつていった。

「おおいたの部落問題学習」から  
小学生高学年～中学生用の教材

# 心豊かな世代が育つ

## 童話の里づくり

441

―シリーズ― あなたの人権・わたしの人権

「みんなが笑顔になるように」

塚脇小学校 5年

井上 瑠芙

差別という言葉聞いて、私が思っていたことは、二つありました。

一つ目は、人によって態度が変わることです。

ある人に対しては、優しくしたり言うことを聞いたりしているけれど、人によっては、きつい言葉を言ったりしている、そんな様子を見たことがあります。

二つ目は、人の体や病気のことと態度が変わることです。

体型のことで相手を傷つける言葉を言ってしまう人もいます。

授業で、「木曾の小太郎」というお話を学びました。

最初に読んで思ったことは、小太

郎のように住んでいる所だけで差別をされることがあったということですね。おどろきました。

物語の中で、小太郎はけっこんについて親や村人に反対されていたけど、あきらめませんでした。

小太郎は、「きつねつきのうち」というものにぎもんを持ち、事実を知り、みんなに伝えていきました。

小太郎があきらめずに「きつねつきのうち」の真実を村人に伝えていくのがたを見て思ったことがあります。それは「あきらめずに伝える」ことの大切さです。

小太郎は、かおるとのけっこんをあきらめず、「きつねつきのうち」は、うわさ話で真実ではないことを村の人たちに伝えていきました。父親からも簡単にはいかないとと言われてもあきらめませんでした。

小太郎のすがたを見て、あきらめなかったのには、二つの理由がある

と思います。

一つ目は、かおるとのけっこんをあきらめなかったからだと思います。好きな人とのけっこんを育った地いきのえいきようで、あきらめなくなかったのだと思います。

二つ目は、「きつねつきのうち」をなくしたからだと思います。

かおるとのけっこんで、小太郎は初めて「きつねつきのうち」というものがあると知り、かおるだけではなく、その地いきに住んでいる人たちを救いたいという気持ちが強くなったのではないかと思います。

このことから、あきらめずに真実を知り伝えていくことで、差別が少しずつ減っていくのではないかと思います。

「木曾の小太郎」の学習で、みんなの考えを聞いて思ったことがあります。

みんな色々な考えを持っていたけれど、やはり「めいしん」にだまされないように気をつけることが大事だと思いました。

めいしんやうわさを信じてしまうと、傷つく人が増えてしまうので、きちんと正しい情報を自分で知り、

伝えることが大事だと思います。

「木曾の小太郎」に出てきた小太郎の家族や村の人たちは、小太郎たちからめいしんであることを聞き、考えが変わっていきました。

人に話すことで、色々な人の考えにえいきようをあたえるものだということが分かりました。

差別について、私が思うことは、私たちの周りにはいろいろな人がいるので、みんなが笑顔になるように過ごすことが大切だと思います。

この人権作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。また、みなさんの投稿もお待ちしております。

わたしたちをとりまく様々な不合理や差別性について気づいたことや感じたことを「二〇〇字程度にまとめて、住所、氏名、連絡先電話番号を記入して(匿名可)、珍珠町教育委員会社会教育課「あなたの人権・わたしの人権」までお届けください。

